

教育省主導の中等日本語教育拡充プロジェクトにおける 訪日研修プログラムの役割と意義

ーインドネシア中等教育日本語教師研修プログラムの場合ー

生田守・藤長かおる

[キーワード] インドネシア、訪日研修、中等日本語教育、教師研修

[要 旨]

本稿は、インドネシア教育省の中等日本語教育の拡充プロジェクト（カリキュラム改訂も含む）と、それを支援する国際交流基金ジャカルタ日本文化センターの教師研修プログラムの中で、5年間にわたる国際交流基金日本語国際センター（浦和）の訪日研修プログラムである「インドネシア中等教育日本語教師研修」が果たした役割と意義を明確にするための実践報告である。

インドネシアでの教師研修を背景として、訪日研修の役割をとらえ、研修の目標設定から実施への道のりを振り返り、研修の内容を包括的に紹介した上で、参加者の日本語運用力の向上や満足度から研修の評価を試みる。

現地側と基金側が連携し、中等教育において比較的経験が浅い教師を招聘し、日本語運用力向上や日本文化・社会を体験し、教師としての成長を支援していくという当訪日研修プログラムの役割と意義は、帰国後の参加者の定着や活躍にも反映され、彼らにとって高い動機付けにもなっている。

1. 背景

国際交流基金日本語国際センター（以下、「センター」と記す）が、インドネシア中等教育の日本語教師向けに実施してきた研修プログラムが、予定の5ヵ年（2006年度ー2010年度）をもって、2010年6月に終了した。この研修の成果を総括するに先立ち、背景となるインドネシア国家教育省主導・国際交流基金ジャカルタ文化センター（以下、「ジャカルタ・センター」と記す）支援で行われた中等日本語教育拡充プロジェクトについて、概略を述べることにする。

国家教育省が作成したカリキュラムに基づいて教授活動を実施するには、教師側にとってはそれなりの研修が必要であり、そのために、インドネシアでは、後述する教育省主導の研修の機会や高校教師会での活動が設けられている。ジャカルタ・センターは、この枠組みの中で、教育省との連携をはかりながら、シラバス・カリキュラム、教材などの開発や、教師研修、勉強会、授業指導を通して、教師の成長を支援している（藤長他 2006：82）。

本稿に関連が深い「教師研修」については、教育省「語学教員研修所」による研修制度があり、「基礎研修」「継続研修」「中級研修」「上級研修」の4種類に段階化されている（藤長他

2006: 82)。研修に参加する日本語教師の日本語力・教授経験などについては、日本語教師のグループ分けとして、藤長他(2006、2007)に詳しい。それによると、「基礎研修」は「日本語能力試験(旧)4級以上3級未満の一般的な教師および新人教師」、「継続研修」は「日本語能力試験(旧)3級程度の次期リーダー候補」、「中級研修」は「インストラクター候補の準リーダー」を概ね対象とし、各コースは2週間(112時間)実施される。「上級研修」は教材作成やワークショップなど必要に応じて開催され、現職教師リーダー(インストラクター)が対象となっている。

「基礎研修」を終了し、現場での経験を積み、教師会参加を経た教師の中から、30名程度がジャカルタ・センターの実施する「渡日前研修」(2週間)に招聘され、修了者の中から優秀な者20名が、センターの訪日研修に参加することになる。「渡日前研修」の詳細は藤長他(2006)に譲るが、概ね日本語能力試験(旧)3級レベルの文法・語彙・漢字についての基礎固めと、訪日に備えての会話・スピーチが目標となっていた。

以上が訪日研修までの「道のり」である。

当訪日研修は、センター既存のプログラムの招聘条件を満たさない、経験の浅い教師を対象とするものである。参加者は、帰国後、次期リーダー候補を目標に、授業の組み立てを理解したうえでより良い授業ができる教師グループを目指した「継続研修」や「中級研修」、さらにはセンターの多国籍短期プログラムなどへの参加等を通じて、研鑽することが期待されている。

以上の事情を背景とし、センターでは訪日研修のコースデザインを行い、研修を実施してきた。次節では、研修の概要について論ずる。

2. 研修の概要

2.1. 基本方針と目標

前節で述べた背景をふまえ、訪日研修を最大限に活用し、帰国後の授業改善につなげることを企図し、以下3点の基本方針を掲げてきた(年度ごとに文言に多少の差異はあるが、趣旨は概ね同じである)。

- ①高校で日本語を教えるにあたって必要な日本語コミュニケーション力の向上をはかる。
- ②滞在中に、帰国後の授業で活用できるリソースを得、教育現場に応用可能な教室活動のためのプランや教材を作成する。
- ③文化体験プログラムや講義、日々の生活を通じて、日本事情に関する理解を深める。

参加者の到達すべき日本語能力のレベルは、2009年度までは、口頭表現力に関してはOPIの中級上(文レベルで日常会話が安定してできるレベル)、言語知識に関しては、日本語能力試験(旧)3級の上位をめざす、ということであった。しかし、最終の2010年度は、より具体的な学習目標を掲げ、日本語コミュニケーション力の定義を明確にするために、JFスタンダ

ードの考えに基づき、受容的活動（聞く・読む）・産出活動（話す・書く）・相互行為活動（口頭のやりとり・書く）・コミュニケーション（運用）に分けて、カテゴリー毎に能力記述文のリスト（添付資料1）を作成し、これを参加者と共有した。概ね、欧州の言語教育の枠組みであるCEFR（Common European Framework of Reference for languages : Learning, teaching, assessment）におけるA2レベルの充実を目指している。

2.2. 研修内容

基本方針とコース目標を柱に、日本語関連科目（トレーニング、総合日本語、アクティビティ、実用会話）・教授法関連科目（教授法、教授法ワークショップ）・日本事情科目（現代の日本、地理と歴史、相撲、文楽など）・日本文化体験プログラム（ホームステイ、高校訪問、伝統文化体験、伝統芸能鑑賞、旅行など）⁽¹⁾の4種類の科目を立てた。

日本語・教授法・日本事情関連科目の総時間数（2010年度）は表1に示す。

表1 授業総時間数

科目		時間数
日本語 関連科目	トレーニング	20
	総合日本語	38
	実用会話	16
	アクティビティ	13
教授法 関連科目	教授法	4
	教材作成ワークショップ	6
日本事情 関連科目	現代の日本	2
	相撲（または文楽）	3
	地理と歴史	3
その他	授業オリエンテーション	2
	テスト	5
	ホームルーム	5
	IT講習	7
合計		124

2.2.1. 日本語関連科目

「トレーニング」では、毎朝、漢字クイズ・「エリン」⁽²⁾を使用した聞き取り練習・文型練習を行なった。

「総合日本語」は、「自分・家族」「買い物」「外出」「趣味・余暇」「学校」「ホームステイ」「物語」「料理」「異文化」の9トピックにより構成し、受容・産出・相互行為活動を満遍なく

行った。「実用会話」は「総合日本語」のトピックと関連し、日本で必要な場面での口頭のやりとりの力をさらに伸ばすために設け、「買い物する」「電車に乗る」「忘れ物」「依頼する」「勧誘する」「訪問する」「注文する」「申し出る」の8トピックを設定した。

「アクティビティ」はボランティア・セッションとスピーチ発表からなる。ボランティア・セッションでは、日本人ボランティアの人といっしょに研修参加者が北浦和・新都心・浦和周辺をめぐる、店の調査やオリエンテーリングをしたり、家族について紹介しあったり、というアクティブな授業を実施した。スピーチ発表は「総合日本語」の「異文化」の授業と関連付けられ、研修期間中の日本での経験を参加者が口頭発表することにより、研修の成果をまとめる活動ともなっている。

上述の4つの日本語関連科目は、「総合日本語」のトピックを中心にした統合シラバスとなっている。科目間の関連だけでなく、学校訪問やホームステイなどの日本文化体験プログラムと直結しているトピックもある。

2.2.2. 教授法関連科目

「教授法」では「みんなの教材サイト」の活用法やレアリア教材の活用法や収集法を紹介し⁽³⁾、「教材作成ワークショップ」において、日本で集めた資料や情報を使って、参加者の現場で実際に使える教材の作成を行い、最後に発表会を開催した。

インドネシア訪日研修は日本語関連科目の比重が高く、教授法関連科目には多くの時間を注いでいない。これは教授法を軽視した結果ではなく、コース目標の「コミュニケーション力の向上」を重視したためである。センターの他の研修の「教授法」で行っている模擬授業は、準備から実施までに時間がかかる上、インドネシアでの研修会でも実施可能である。しかし、訪日研修ならではの機会を活かし、日本でしかできないことに特化しようとする、帰国後実際に使える「リソース」を活用した教室活動プランを作成することが最善と考えられ、このような授業を実施することとなった。

2.2.3. 日本事情関連科目

日本事情関連科目としては、現代日本事情に関するものと、日本文化体験プログラムの一環として実施して相撲観戦（あるいは文楽鑑賞）の予備知識を与えるものと、関西旅行に備えるものの3科目からなり、文化体験プログラムと直結している。

3. 訪日研修の評価

研修参加者の日本語運用力の向上および研修への満足度から、当訪日研修の評価を試みる。

3.1. 日本語運用力向上の度合い

3.1.1. 修了時テストから

当研修では、開始時と修了時に簡易 OPI テストを行っている。テスト時間は15分程度と短くなっているが、級の定義は OPI に準じたものである。過去に行われた 5 回の研修のうち、開始時・修了時双方のデータが残っている、2006、2007、2008 年度の 3 年分の平均から、事前事後の比較を行うと、表 2 のようになる。

表 2 会話テストー事前事後の推移

	中級一上	中級一中	中級一下	初級一上
開始時 (100%)	6.7%	45%	33.3%	15%
修了時 (100%)	21.7%	63.3%	13.3%	1.7%

これによると、口頭運用能力に関しては、着実に伸びを見せており、開始時中級上と中級中がほぼ 5 割であったのが、修了時には 8 割を超えていることがわかる。

また、参加者は、ジャカルタ・センターでの「渡日前研修」において 2 回、当研修の修了時に 1 回、年度の異なる日本語能力試験（旧 3 級の過去問題）を受けているが、年度によって問題が異なり、正確な比較はできないものの、概ね総合得点（400 点中）10 点程度の伸びを示しているが、向上の度合いは顕著ではない。しかし、試験種別に見ていくと、聴解の伸びは著しいが、文法・読解の伸びが芳しくないという結果が出ている。

以上（会話テスト・能力試験）から考えられるのは、参加者の日本語運用力は、口頭表現および聴解に関して伸びており、これはコース・カリキュラムの力点の置き方を反映していると考えられる。

3.1.2. 研修参加者の自己評価

5 年間を通じて、研修終了時アンケートに、参加者の日本語力のどの部分が伸びたと思うかという調査を行ってきた。そこでは、①聞く、②話す、③読む、④書く、⑤語彙・漢字、⑥文型や文法の知識の 6 分野別に、「とても伸びた」（4 点）から「伸びなかった」（1 点）をスケールにし、点数を付けさせた。カリキュラムに大幅な変更はなかったため、年度ごとの推移よりも、全体としての傾向を把握するために、全参加者の総数によりまとめると、以下のようになる。

表3 日本語力の伸びに関する参加者の自己評価

	4	3	2	1	無回答	平均
①聞く	28%	55%	15%	1%	1%	3.11
②話す	26%	64%	7%	0%	1%	3.13
③読む	31%	58%	9%	0%	1%	3.19
④書く	30%	61%	8%	0%	1%	3.14
⑤語彙・漢字	32%	56%	10%	0%	1%	3.19
⑥文法・文型	25%	68%	6%	0%	1%	3.19

これによると、全項目において、平均が3.1以上3.2未満の範囲に位置し、参加者の伸びに関する自己評価が高いことがわかるが、「言語知識や読むこと」に関する項目が、「聞く・話す・書く」に比べてやや高いこともわかる。

2010年度においては、「総合日本語」の授業トピック毎の学習目標からなる能力記述文のリストを作成し、研修開始時と修了時に、その段階で自分がどれだけできるかを自己評価させた(「◎よくできる」「○できる」「△少しできる」「×できない」の4段階で、集計時に4点～1点に換算)。リストおよび得点の伸びについては添付資料2を参照されたい。

表によると、伸びのポイント⁽⁴⁾が高い項目として、「時刻表や駅の標示などを読むことができる」(+23)、「簡単な日本の物語を読むことができる」・「自分の国の物語を話すことができる」・「自分の体験や感じたことをスピーチにすることができる」(+21)、「得意な料理の作り方を簡単に説明することができる」(+20)の5項目が挙げられる。

逆に、「趣味や休みの日の行動について友達と話し合うことができる」(+3)、「自分の家族について日本人に説明することができる」(+7)、「自分の家族について友達に説明することができる」「食べ物や飲み物を注文することができる」(+8)の3項目は比較的ポイントが低かった。

伸びの高い項目は、授業で学んだことが、教室内の活動として実現し、自信を持ってコミュニケーション活動ができた、ととらえられている結果と考えられる。一方、伸びの低い項目は、教室外にコミュニケーション活動が広がるものが多く、ホームステイの際、自分の家族についてうまく説明できなかったことや、日本人の友達と趣味などについて話し合う機会がなかったことなどが、これらの項目の伸びが低かった要因と推測される。

また、参加者20名中17名は、すべての項目において、現状維持か向上のいずれかを見せたが、3名は1～4項目において、終了後の伸びのポイントが減少した。

3.1.3. まとめ

3.1. を分析すると、客観的な数値（修了時のテスト）からも、研修参加者の主観的な自己評価からも、研修による日本語力の成長がうかがわれる。とりわけ前者からは口頭表現力・コミュニケーション力の伸びがうかがえ、後者からは言語知識面での伸びが自覚されている点が指摘できよう。

3.2. 研修への満足度

参加者の研修に対する満足度を、5年間に渡るアンケート調査結果で見てみる。次の表は研修への満足度と、研修後に参加者自身がどう変化したかを、4点のスケールで答えたものである。

表4 研修への満足度と修了後の変化

	4	3	2	1	無回答	平均
1. 研修への満足度	67.0%	30.7%	2.3%	0%	11%	3.65
2. 変化						
①日本語が上手になった。	14%	72%	13%	0%	1%	3.01
②日本人や日本のことがよくわかるようになった。	36%	59%	4%	0%	1%	3.23
③教えるためのアイデアが増えた。	57%	40%	2%	0%	1%	3.56

これによると、研修への満足度はかなり高いものと言ってよいだろう。「③教えるためのアイデアが増えた」が「①日本語が上手になった」よりも高い数値となっているが、これは教授法や教材作成ワークショップの授業からだけではなく、日本語関連授業からも教えるヒントを得たということの意味している。

3.3. 評価まとめ

以上、日本語運用力向上の度合いと研修への満足度から考察すると、2.1. で述べた基本目標が、具体的な数値を伴わない、やや曖昧なものであったにせよ、ほぼ研修生のレベルをこの方向で向上させたという点において、当研修の目標はある程度達成されたと見てよいだろう。2010年度の目標リスト（付表）にある項目は、授業の内容に反映させ、研修生の自己評価も、付表のほぼすべての項目において向上していることから、このことは裏付けられよう。

4. 訪日研修の位置づけと展望

当研修は、インドネシア国家教育省が主導し、国際交流基金がジャカルタ文化センターを中心に支援を続けている中等日本語教員のためのプロジェクトの一つである教師研修の一環に組み込まれている。すなわち、ジャカルタ・センターにおける渡日前研修と当研修が両輪となり、5年間の計画で実施されてきた。

参加した教師は100名にのぼり、うち93名（内常勤49名）が現在も日本語教師として活躍しており、9名が教師会の会長職に就いていることが確認されている（ジャカルタ・センター調べ）。

また、修了時のアンケートからも、インドネシア帰国後日本語学習や教授法ブラッシュアップを継続したいという声が全員から聞かれ、訪日研修が参加者にもたらす影響は今後へのモチベーションを含め、かなり大きなものと言えるだろう。

センターにおいては、1996年度から2005年度にかけて、「タイ中等学校日本語教師研修」が9回にわたり実施された（生田・北村2006）。この研修は、中等日本語教師を養成するために、タイ国教育省普通教育局基礎教育委員会と国際交流基金バンコク日本語センターの共同事業として実施された「中等学校現職教員日本語教師養成講座」の一環をなすものであり、インドネシア研修の先駆的存在であるが、背景をなすプロジェクトが「養成」である点が、インドネシアのプロジェクトと大きく異なる点である。しかしながら、訪日研修のプロジェクトにおける位置づけや、規模・内容などにおいて共通する点も多い。

双方共に、現地側と基金側が連携し、日本語教育拡充プログラムを推し進める中で、経験が浅く、既存のセンタープログラムで招聘されなかった教師を招聘し、日本語能力向上や日本文化・社会を体験させ、教師としての成長を支援する役割を担う研修という点においては、その目的が共通している。

日本語教育を拡充していくにあたり、タイやインドネシアのこのような中等教育のためのプロジェクトやセンターにおける訪日研修の重要性は、いくら強調してもしすぎることはない。

今後、このような訪日研修が実施される際には、この2つの訪日研修の成果が活かされるべきである。同時に、JF日本語教育スタンダードに基づく日本語プログラムの標準化、評価システムの整備、研修参加者に対するフォローアップ調査や研修も必要と思われる。

〔注〕

- ^① 伝統文化体験では相撲観戦を、伝統芸能鑑賞では文楽鑑賞を実施した。また旅行では、奈良・京都の関西方面を訪れた。
- ^② 国際交流基金『エリンが挑戦！にほんごできます。』<<https://www.erin.ne.jp/jp/>>参照。
- ^③ 国際交流基金『みんなの教材サイト』<<http://minnanokyozai.jp/>>、国際交流基金編（2006）『すぐに使える「レアリア・生教材」アイデア帖』、同（2008）『すぐに使える「レアリア・生教材」コレクションCD-ROMブック』などによる。
- ^④ 個人の事後のポイントから事前のポイントを減じたものの参加者総和に当たる。

〔参考文献〕

- 生田守・北村武士（2006）「単一国研修における海外センターと国内の連携－タイ中学校日本語教師研修の場合－」、『国際交流基金 日本語教育紀要』第2号、97－104、国際交流基金日本語国際センター
- 藤長かおる・古川嘉子・エフィルシアナ（2006）「インドネシアの高校日本語教師の成長を支援する教師研修プログラム」『国際交流基金 日本語教育紀要』第2号、81－96、国際交流基金日本語国際センター
- 藤長かおる・登里民子・有馬淳一（2007）「現地研修と訪日研修の連携－インドネシア中等教育日本語教師研修のコースデザイナー」『国際交流基金 日本語教育紀要』第3号、153－168、国際交流基金日本語国際センター

添付資料1 能力記述文による研修目標

	カテゴリー	目標能力記述文	
受容的活動	聞く	包括的な聴解	はっきりとゆっくりとした発音なら、自分にとっていちばん関係のあること(例:ごく基本的な個人や家族の情報、買い物)に関連した単語や表現が理解できる。
		母語話者同士の対話	ゆっくりと、はっきりとした議論ならば、通常自分の周りの議論の話題は分かる。
		アナウンスや指示	短い、はっきりとした、簡単なメッセージやアナウンスの大事なところは聞き取れる。
	読む	世情を把握	広告、メニュー、時刻表のような、簡単な日常の資料の中から予測できる特定の情報を見つけることができる。
		情報や議論	手紙、パンフレット、新聞の短い事件記事のような、簡潔な文章の中から特定の情報を取り出すことができる。
産出活動	話す	総合的な発話	ある人の生活、仕事先の環境、毎日のやること、好き嫌いなどについて、単文レベルで話すことができる。
		経験談	事柄を列挙して簡単に述べたり、物語るができる。自分の周りの環境、例えば、人や家族、場所、仕事、学習経験などの日常を述べるができる。
		講演	身近な話題について、短い、練習済みの基本的なプレゼンテーションを行い、その後質問に答えることができる。
	書く	総合的な書く活動	「そして」「しかし」「なぜなら」などの簡単な接続詞でつなげた簡単な表現や文を書くことができる。
相互行為活動	口頭のやりとり	会話	挨拶、別れ、紹介、感謝、招待、提案などの社交的な接触の関係を確立することができる。
		協同作業	簡単な表現を使って日常の課題に関するやり取りができ、物を要求したり、与えたり、簡単な情報を得たり、次にすることを話し合うことができる。
		情報の交換	個人的な情報(簡単な説明や指示)を求めたり、提供したりできる。
		インタビュー	インタビューで簡単な質問に答えたり、簡単な意見に対応できる。
	書く	記録、メッセージ、書式	直接必要なことの要件についての短い、簡単なメモや伝言を書くことができる。
コミュニケーション	運用	使用語彙領域	馴染みのある状況や話題に関して、日常的な生活上の交渉を行うのに十分な語彙を持っている。
		発話の順番(ディスコース能力)	簡単な対面での会話を始め、続け、終えることができる。
		一貫性と結束性(ディスコース能力)	簡単な文をつなげ、ポイントを並べるだけであるが、最も頻繁に出現する接続表現を使って物事を語ったり、何かを描写することができる。

添付資料2 総合日本語自己評価

トピック	番号	能力記述文	伸び
自分・家族	①	自分の家族について、友達に説明することができる。	8
	②	友達の家族について、質問して、答えを聞くことができる。	10
	③	短い自己紹介をすることができる。	11
ホームステイ	①	自分の家族について、日本人に説明することができる。	7
	②	写真などを使って、ホストファミリーの紹介を発表することができる。	13
	③	ホストファミリーに、簡単なお礼の手紙やメールを書くことができる。	13
外出	①	日本人に道を聞いたり、乗り物の乗り方を聞くことができる。	12
	②	時刻表や駅の標示などを読むことができる。	23
	③	旅行の簡単な計画を立てることができる。	12
学校	①	自分の国の教育や学校の制度について、日本人に簡単な説明をすることができる。	15
	②	自分の学校や教室の様子について、日本の高校生に話すことができる。	13
	③	日本の高校や学生について、ポスターを使って、教室で発表することができる。	14
買い物	①	日本のいろいろな店で買い物する時に、必要な表現がわかって使える。	15
	②	おみやげに何をかうかについて、友達と買い物の相談ができる。	10
	③	自分がほしいものの特徴（値段・色・形など）を言うことができる。	11
趣味・余暇	①	趣味や休みの日の行動について、友達と話し合うことができる。	3
	②	友達や先生を外出などに誘うことができる。	10
	③	友達や先生からの誘いを、受けたり、断ったりすることができる。	9
料理	①	日本料理の作り方を聞いて、理解することができる。	12
	②	食べ物や飲み物を注文することができる。	8
	③	得意な料理の作り方を簡単に説明することができる。	20
物語	①	簡単な日本の物語（昔話）を読むことができる。	21
	②	出来事（いつ、どこで、だれが、何をした）を友達に話すことができる。	10
	③	自分の国の物語（昔話）を話すことができる。	21
異文化	①	文化や習慣の違いについて、簡単に話すことができる。	19
	②	自分の体験や感じたことをスピーチすることができる。	21
	③	発表をしたあと質問に答えたり、友達の発表のあと質問したりできる。	18
共通	①	身近な話題について、文を並べて話すことができる。	12
	②	家族や習慣などについて、日本人にインタビューしたり、答えたりすることができる。	18
	③	経験したことを、簡単な言葉を使って、書くことができる。	11